

河内国壺井通法寺に就いて

——羽曳野市通法寺址の隆光墓碑に因んで——

古賀克彦

隆光の墓碑

隆光の墓碑は、永島福太郎・林亮勝「校訂」『隆光僧正日記』第三（続群書類従完成会「史料纂集 古記録編十三」、一九七〇年九月）「解題」末尾によると、次の四箇所に在る。①大和唐招提寺西方院、②大和室生寺、③山城乙訓寺、④大和超昇寺址（平城宮跡）。尚、同書口絵には、①の五輪塔（墓石表面に梵字と「護持院僧録／大僧正隆光」と②の角形墓（墓石表面に梵字と「大僧正／隆光」）の写真が載る。因みに③は角柱墓（墓石表面に梵字と「當寺中興／大僧正隆光」。同寺歴代に非ずして位牌は無いが、画像と享保十六年の過去帳に「大僧正隆光 護持院開基 享保九甲辰（六月）」、④は自然石（墓石表面は摩滅して判読不能）。だが管見ではそれに、⑤河内通法寺址の角形墓、を加える事が出来る（文献資料では、『角川日本地名大辞典』二七「大阪府」、角川書店、一九八三年十月、の地名項目「通法寺（羽曳野市）」が少し触れる程度である）。

通法寺通史

河内国壺井に嘗て存在した石丸山通法寺の地は、多田満仲の四男、源頼信が寛仁四年（一〇二〇）河内守（従四位上鎮守府將軍）に任ぜられ、古市郡の香炉峰に館を築いた事に始まり、子息頼義（正四位下鎮守府將軍伊予守。治安元年「一〇二二」）、その長男八幡太郎義家（正四位下鎮守府將軍陸奥守。長暦二年「一〇三八」・次男加茂次郎義綱・三男新羅三郎義光が相次いで誕生することにより、河内源氏の嫡流発祥の地となったと云う。寛保四年（延享改元。一七四四）成立の「通法寺興廃記」（後述する『羽曳野市史』四）等によれば、長久四年（一〇四三）九月五日、頼信（或いは頼義）が狩獵の途中、仁海谷で入手した千手観音像を本尊とし、石丸にあった頼信居館の南側に観音堂を建立したのが当寺の濫觴であり、永承三年（一〇四八）九月一日、頼信が七十四歳で没した時には、通法寺山上巽に葬られ、子の頼義は密教僧の仁海や浄土教の源信に帰依

し当寺に田を寄進、遺言により救世大士殿の下に葬られた、と伝える（『角川日本地名大辞典』二七「大阪府」の寺名項目「通法寺（羽曳野市）」では、こうした葬方を墓堂形式という、とする）。また、後述する「河内通法寺畧記」には、頼義が致仕の後、入道して信海と号し通法寺を造立、とする。よって、当地には河内源氏の基礎を築いた、頼信・頼義・義家の三代墓石が、夫々、通法寺本堂跡の南東（南河内郡太子町側）・観音堂跡近辺・頼信墓東方、に現存する。但し、「河内源氏詞之伝」（『羽曳野市史』四）の、義家の五男義時が天仁二年（一一〇九）八月に上記三代の霊を祀り壺井神社（現在は壺井八幡宮左側の境内摂社）を創建し、菩提寺として長久四年に通法寺を建立した、との記述は、後者の年代を前者に近づければ、最も説得力がある。尚、当地を「壺井」と称するのは、「河内鑑名所記」が説く次のような伝承によると謂う。「前九年の役」の際、大早魃に苦しんだ頼義・義家父子の率いる軍が、伊勢神宮に祈ったところ即座に清水が湧出し、喉を潤し氣力を回復した軍勢は勝利を収めた。そこで凱旋の折、その清水を壺に入れて持ち帰り、当地に井戸を穿って沈め記念とした、と云う。この清泉「壺井」は、今も壺井八幡宮石段前にある。これが事実ならば、通法寺は壺井の音通だろうから、それ以後であろう（従って、その読みは地名・寺名共、「つうほうじ」ではなく、「つうぼうじ」が正しかろう）。

古代末には、平家興盛の頃中絶したが、その後、頼朝の帰依で再興し（文治元年「一一八五」の「通法寺供僧寄人等解」。但し、偽文書か）、後には関東祈禱寺の一となった、と伝える。湯之上隆「関東祈禱寺の成立と分布」（『九州史学』六四号、一九七八年。のち、同『日本中世の政治権力と仏教』思文閣、二〇〇一年二月）によれば、河内国の関東祈禱寺は七力寺。因みに隣国摂津五・和泉一。『大阪府の地名Ⅱ』（平凡社〔日本歴史地名大系二八〕、一九八六年二月）によれば、確実な史料としての通法寺の初出は、建治元年（一二七五）十二月二十四日六波羅下文（高木文書）の「河内国通法寺事」で、「右、当寺者伊予入道殿（頼義）御建立之道場、將軍家御帰依之靈地也」とある。弘安二年（一二七九）二月には僧定尊が当寺の執行職を「にんそう房」に譲っており、その讓状に「右大將家（頼朝）御教書いりの執行職分」とある（通法寺及壺井八幡宮文書）。弘安九年（一二八六）九月一日の六波羅禁制にも、当寺は「関東嚴重之御祈禱所、圻内無双之大靈驗所也」とある（同）。これら中世の動向に就いては、羽曳野市史編纂委員会「編」『羽曳野市史』四卷「史料編」二「古代中世文獻」（同市、一九八一年六月。中世担当・黒田俊雄）の掲載編年史料や、川添昭二書評（『日本史研究』二三四号、同会、一九八二年二月。のち、同『解題・序跋集 回顧・略年譜・著作目録』權歌書房、一九九七年三月。当寺関係史料として「尊敬關武家手鑑仁治二年「一

二四二」二月廿四日六波羅御教書」が洩れている事を指摘）が参考になる。『大阪府の地名Ⅱ』の「壺井村」「壺井八幡宮」「通法寺村」「通法寺跡」項にも史料を挙げての詳述がある。

元弘三年（一二三三）の楠木正成による合戦以降、再三兵火を受けて焼失したが、足利尊氏の保護で再興、義満が修営。戦国時代に織田・松永両軍の戦鬪で伽藍炎上。近世では、征夷大將軍となる為に源氏の後裔を称した徳川氏が、祖先の寺である、として元禄年間に再建した。『国史大系』三八卷『徳川実紀』第一編の「東照宮御実紀」巻一にも「第四の子頼信（中略）河内国壺井の通法寺にをさめ。今に祀典絶ず。」とある。

築瀬一雄『社寺縁起の研究』（勉誠社、一九九八年二月）に載る「河通法寺畧記」「河内古市郡壺井宮略えんぎ」といった近世の縁起類でも、前者には、「元禄八亥年水戸光国公^{ミナモト}両郷之古実ヲ糺サレ護持院僧録大僧正是ノ舊跡ヲ聞キ玉ヒ状ヲ具テ再宮ノ鴻願ヲ奏聞シ奉ル」とあり、元禄十三年（一七〇〇）十一月再建落慶の記事が見え、後者には「元禄十三庚辰秋九月」の年紀がある（当地の庄屋兼社家の多田義直が堂舎再興と伝える）。『隆光僧正日記』第二（統群書類従完成会「史料纂集 古記録編十二」、一九七〇年三月）の同年十一月朔日条（頭注は「河内通法寺及び壺井八幡社神主ら新知拜領の御禮に登城す」）に、

河州通法寺（頼雅）ニ壺井神主（多田十郎左衛門）今日新知拜領之御札申上、福壽院（護持院寺中）案内ニ遣之、直ニ御老中・若

河内国壺井通法寺に就いて（古 賀）

年寄・寺社奉行衆へも遣之、三之丸へ被爲成、御供、御仕舞被遊翌年二月十六日条（頭注は「河内通法寺の年始御札の献上」）に、

兩山（長谷寺・智積院）使僧御札献上相濟、通法寺使僧ハ今日御札不献上、正月ニ可願之處ニ、姫君様御祈禱ニ取込令念、去十日ニ出羽守殿へ願之處ニ、寺社奉行へ可願之旨被申渡、則十一日ニ青山幡^{ハタ}守殿へ願之、其願書、通法寺儀者御取立之事ニ御座候間、年始之御札献上之儀、去年奉願之候、弥來十六日ニ御札献上可仕候、且又、小知之儀ニ而候間、毎年以使僧御札献上難仕候間、毎年御初穂白銀十枚被下候様ニ奉願之候、以上、此願未相濟也、同年三月十八日条（頭注は「通法寺使僧に御初穂料を付す」）に、

通法寺使僧へ銀十枚被下之、御札ニ愚衲ヨリ使僧遣之、と、夫々関連記事がある（傍注の括弧部分は本文中に挿入した）。

この時期の『長谷寺文書』に、次の通法寺宛「常法談所」免許状がある（坂本正仁「真言宗新義派護持院僧録について―特に隆光代を中心として―」（『仏教史研究』8号、日本仏教史学会、一九七四年十月）。但し、通法寺再興を元禄十二年二月とする）。

於河州新義之談林無之所、此回貴寺御建立、一派之繁興誠以慶幸至候、因茲常法談所令免許之間、於建法幢提唱無怠者為珍重者也、

元禄十三年極月 智積院僧正専戒書判

年号月日 小池坊僧正英岳書判

通法寺

享保九年（一七二四）の隆光滅後の通法寺を巡る状況は、現在長谷寺に遺る、享保二十年（一七三五）十一月以降の方丈鑑

事記録『萬記録』が詳しい（『續豊山全書』十九卷「史傳部」二、續豊山全書刊行會一九七四年十一月。これは享保二十年十月の通法寺後住問題を契機として記述されたものである（林亮勝『長谷寺万記録』について「同巻付録」会報「8号」・「江戸時代中期における真言宗新義派の諸問題——河内通法寺・山城乙訓寺・下総妙見寺後住問題を通して見た——」（『日本佛教學會年報』39號『佛教教團の諸問題』、一九七四年三月）。「大成令續集十九」（辻善之助『日本仏教史』八、岩波書店、一九六一年一月）によると、寛延二年（二七四九）、壺井權現八幡兩社修復勸化、宝暦四年（二七五四）、通法寺修復料下賜、とある。享和初年（二八〇二）成立の『河内名所図会』三ノ二十五丁に「古市郡通法寺村石丸山通法寺（宗旨 真言新義 和州長谷寺ニ屬ス）」とあり、朱印は二百石。これは同国では金剛寺三〇七石、与田八幡二百石十五貫二百文に次ぐ。

壺井八幡宮には元禄十四年（二七〇二）九月に「壺井權現」の宣下があり、十一（或いは十二）月正一位勅諡（壺井八幡の朱印三十石は先の多田隠岐守へ。同村の赤井權現五十石も同人へ）。

だが、幕府崩壊と共に通法寺も衰え、近代初頭に寺領上地し（二八七二）、廃寺となり（二八七三）、建物は全て壊された。現在ある門（源氏／祖郷）の額が掲げられていると鐘楼は戦後復元されたものである。北西弘「通法寺」（『國史大辞典』九卷、吉川弘文館、一九八八年九月。『日本仏教史辞典』同、一九九九年一月）によれば、寺伝来の仏像（阿弥陀三尊）は羽曳野市

通法寺町（旧・中河内郡龍華村）の浄土真宗本願寺派香炉山専光寺に、什宝は長谷寺に（金本朝一『太子町・当麻の道』綜文館、一九九八年五月）、夫々移された。

壺井寺は廃寺となつた通法寺の後身か

瀬田修然・高野修『遊行・藤沢歴代上人史——時宗七百年史』（松秀寺〔白金叢書〕、一九八九年十月）・高野修『時宗教団史——時衆の歴史と文化——』（岩田書院、二〇〇三年三月）によれば、和泉市真言宗壺井寺が通法寺の名跡を継承していると云う。併し和泉市に壺井寺は見当たらず（但し、同市坪井町〔旧・泉北郡横山村坪井〕には高野山真言宗鳳林寺がある）、柏原市（元・河内国大泉郡法善寺村。旧・中河内郡堅下村）には融通念仏宗護法山壺井寺がある。融通念仏宗教学研究所（編纂）『融通念仏宗年表』（融通念仏宗総本山大念仏寺、一九八二年三月）附録の延宝五年（二六七七）六月七日年紀の「大念仏寺四十五代記録并未寺帳」には壺井寺は見当たらず、同所河州大泉郡法善寺村淨福寺は載る。淨福寺は元和三年（二六一七）に道念創建、とある。同じく附録の「入衆僧一覽（近世）」では元禄一四・一二・一二、明和二・一二・一四の項に河州大泉郡法善寺村坪井寺、寛政一〇・六・八、文政七・一一・二九の項に河州大泉郡法善寺村壺井寺、との記載がある。おそらく「淨福寺」が正式名称だったのであろうが、同寺境内にある「壺

井観音堂（本尊は通称「避雷観音」）から何時しか「壺井寺」と呼称されるようになったのであろう。従つてこの壺井寺は通法寺とは全く関係がない。尚、石川修道「日興上人」「本門寺根源」初期道場の位置について―重須地頭・石川氏との関わり―（「日蓮宗現代宗教研究所所報・現代宗教研究」三三号、日蓮宗務院、一九九九年三月）も「通法寺（現・壺井寺）」とするが、根拠の明示はない。

時衆との関わり

ところで通法寺は、永正十一年（一五二四）九月三日に称愚が、遊行二十二代意樂より法燈を受け、「遊行二十三代他阿弥陀仏」と成った場所である（遊行系図）。つまり、この時期は遊行時衆の寺でもあった（或いは、大寺故に時衆も止住していたか）。但し、明応九年（一五〇〇）には元繁（備後守）なる人物から、当寺並びに末寺領の諸課役免除状が下されている（「羽曳野市史」四）。時宗末寺帳にも河内国壺井通法寺が載る。

また、正平八年（一三五三）の年紀を持つ、壺井八幡神像胎内納入千体地藏菩薩像奥書願文に書かれた六字名号は時衆様（一遍独特の草書名号風）である。（黒田俊雄「壺井八幡神像の胎内納入千体地藏絵像について」（「羽曳野市史編纂紀要 羽曳野市史」一号、一九七六年八月）。金本朝一前掲書では通法寺の宗旨を、「浄土宗 後に真言宗」とするが、時宗の事かもしれない。

河内国壺井通法寺に就いて（古賀）

通法寺と親鸞の母を巡る誤伝承

日下無倫「眞宗史の研究」（平樂寺書店、一九三二年七月。のち、臨川書店、一九七五年一月再版）所収論文「親鸞聖人母公の研究」の第八章「吉光女菩提所としての通法寺」に、親鸞の母とされる吉光女が義家の嫡男義親の娘である、との伝承から、「吉光女は通法寺の新館に生れ、（中略）南河内郡の通法寺は聖人御母方菩提所として九百年の由緒を有し、天下有名な霊場なり云々」との、近代に創作された珍説を批判的に紹介しているが、この義親は各地で殺人・略奪を繰り返した挙げ句（鎮西を荒らしたので追討され隠岐に流されたが、父の死後出雲に逃れていた）、追討使因幡守平正盛（清盛祖父）に嘉承三年（天仁改元。一一〇八年）一月、討伐された、と伝える。この年に娘が生まれたとして、親鸞は承安三（一二七三）年生であるから、生母は六十五歳での出産となる。尚、『叢林集』には『康楽寺物語』を根拠に「母者对馬守義親之息女」とするが（『眞宗史料集成』八巻「寺誌・遺跡」、同朋舎、一九七四年十二月）、『大谷嫡流実記』には義親の子である為義の娘とし、『専修寺門室系譜』には、義親の子である義行の娘としている（同七巻「伝記・系図」、一九七五年十二月）。

（キーワード） 壺井通法寺、山城乙訓寺、隆光、一遍時衆

（国府台女子学院高等部教諭）

more acceptable to them.

153. Myōe's Understanding of the Exoteric and Esoteric Buddhism: Focusing on 'Gohimitsu goshō to dōtaishetsu'

Sei NORO

The theory of Identity between the Five Secrets and the Five Sacred 'Gohimitsu goshō to dōtaishetsu 五秘密与五聖同体説' was described in the *Kegon bukko zanmaikan hihōzō* 華嚴仏光三昧觀秘宝蔵 volume two written by Myōebo Kōben 明恵房高弁 (1173-1232) in his later life. According to that theory, the five saints, 'Goshō 五聖,' Mañjuśrī, Samantabhadra, Maitreya, Avalokiteśvara and Vairocana, originating in the *Avatamsaka* sūtra, and the five secret worthies, 'Gohimitsuson 五秘密尊,' of Esoteric Buddhism are essentially identical. When Myōe of the 'Gohimitsu' is studied, it turns out that Myōe had a keen interest in 'Gohimitsuhō 五秘密法' from an early stage. He set up in the *Hihōzō* the Goshō theory that he developed from the 'San-sheng yuanrong' theory 三聖円融説 of Li Tongxuan 李通玄 (635-730). And he insisted that 'Goshō' is the same as 'Gohimitsu' in the point that both take great wisdom and great compassion as their essence. However, 'Goshō' and 'Gohimitsu' are not equal in their mutual relationship but 'Goshō' of Huayan is included in 'Gohimitsu,' not vice versa. In this paper, the place of Esoteric Buddhist doctrine in Myōe's thought is considered by examining the 'Dōtaishetsu' described in the *Hihōzō*.

154. For taking a *Tsuboi* (壺井) *Tsūbō-ji* temple (通法寺) in Ancient *Kawachi* Country (河内国): Connected with Priest *Ryukō* (隆光)'s tombstone of ruined *Tsubo-ji* temple (通法寺址) in *Habikino* City (羽曳野市)

Katsuhiko KOGA

Priest Ryukō 隆光's tombstone is found in the following four places. (1) Tōshōdai-ji 唐招提寺, (2) Murō-ji 室生寺, (3) Otokuni-dera 乙訓寺, (4) the ruined Chōshō-ji 超昇寺址. We can add (5) the ruined Tsūbō-ji 通法寺址 to

this list.

It is said that the Tsübō-ji which existed at Tsuboi 壺井 in Kawachi 河内国 began with an inn constructed in 1020 by Minamoto no Yorinobu 源頼信, fourth son of Tada Mitsunaka 多田満仲 and with the birth of his son Yoriyoshi 頼義, his first son Yoshiie 義家, his second son Yoshitsuna 義綱 and his third son Yoshimitsu 義光 it became the base of the main line of the Kawachi Genji 河内源氏, with its main image a thousand-armed Kannon 千手観音, which Yorinobu 頼信 obtained on his way to a hunt. This is the origin of this temple in 1043 with the establishment of a Kannon-dō 観音堂 on the south side in his residence. After his retirement Yoriyoshi 頼義 became a monk and established the Tsübō-ji. This place preserves the 3 tombstones of Yorinobu 頼信, Yoriyoshi 頼義 and Yoshiie 義家. But, there is a description of Yoshiie's 義家 fifth son Yoshitoki 義時 worshipping the souls of the aforementioned three generations, and establishing the Tsuboi-jinja 壺井神社 in 1109, and establishing the Tsübō-ji in 1048 as the family memorial temple. If the latter date were closer to the former, it would be more persuasive.

After that, three times it was burned in war. In more recent times it became the memorial temple of the Tokugawa 徳川 clan founders, being rebuilt in the Genroku 元禄 period (late 17th c.), the efforts of the Priest Ryukō 隆光 being especially important.

However, with the shogunate's collapse, this temple too became weak, In 1871 the temple lands were confiscated, and in 1873 the temple was abandoned to ruin, the buildings completely destroyed. The present-day gate and bell-tower are post-World War II restorations.

At present there exists a Tsuboi-dera 壺井寺, but this has no relation at all with Tsübō-ji.

On September 3, 1514 in the Tsübō-ji, Shōgu 称愚 received the name Yūgyō 遊行 from the twenty-second Yūgyō, Igyō 意楽, becoming the twenty-third Yūgyō. In other words, at this time this was a temple of the Yūgyō Jishu sect 時衆.

According to legend, Shinran's 親鸞 mother was the daughter of Minamoto Yoshiie's 源義家 legitimate son Yoshichika 義親. There is a strange story which was created in recent times that it is possible she was born in the extension at Tsūbō-ji. It is said that Yoshichika committed murder and mayhem hither and yon until subdued in January 1108 by Taira no Masamori 平正盛, grandfather of Taira no Kiyomori 平清盛. If we suppose this daughter was born in 1108, since Shinran was born in 1173, her mother would have given birth at age 65.

155. The legend of Satī in the *Kālikā-purāṇa*

Chisato MAEDA

Satī is a daughter of Dakṣa and a wife of Śiva. Dakṣa celebrated a festival of sacrifice, but did not invite Satī or Śiva. Hence, she was racked with grief and perished by throwing herself into a fire. The gods hacked to pieces her dead body. The fragments of her dead body fell down everywhere. Those places, in which many goddesses were born, have been called Śākta-pīṭha. The legend of Satī is an important myth that explains the origin of Śākta-pīṭhas. Moreover the legend is related to the custom of widow suicide in Hindu society.

How is Satī described in the *Kālikā-purāṇa* which was composed to spread Śakti's worship? In this paper I address two points, the birth and the death of Satī.

156. The Cakravartins in the Jain Carita Literatures

Tomoyuki YAMAHATA

The *Hariseṇacarī* (Skt. *Harīṣeṇacarita*) is an example of Apabhraṃśa narrative literature and Hariṣeṇa is one of the twelve Cakravartins in the Sixty-three Jain Great Men (Śālākā/Mahā-puruṣas). Though the Jain features of the cakravartin basically correspond with Buddhist ideas, there are various differences. Particularly, the Buddhist cakravartins are the sovereign of this